



社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

2025. 9

年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～



Helping each other, kindness, and sacrifice are lasting and unforgettable.

この絵と言葉は、イランの難民申請者によるものです。

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

カトリック教会の 情報アクセシビリティ(近づきやすさ)の「準備」

障がい者委員会 ^{いし}石井 ^{のぞみ}望 神父

シナピス・ニュース 8 月号の宮永久人さんの記事を読み、カトリック教会における障害者や高齢者の情報アクセシビリティについて、改めて考えた。特別な行事に限らず、小教区の通常のミサや活動においても、除外されたり、取り残されている障害をもつ人や高齢者がいるのは事実だ。

こうした状況に気づかない、あるいは対応がなされないために、当事者が声を上げることも諦め、足が遠のく場合は少なくない。ある教会では「うちには幸い困っている障害者はいないので必要ありません」と言われることすらある。

しかし、声を挙げない人々の思いにも気づきたい。

- ・「難聴なので、聖堂や集会室に聴こえやすくする(補聴)システムがあれば…」
- ・「マスクをしたまま話されると、聞き取りにくいし、表情や口も読み取れない…」
- ・「字幕や筆談があれば…」
- ・「いつでもどこでも手話通訳の環境があればうれしい…」
- ・「分かち合いの時、複数の人が同時に話すと聞き分けられない…」
- ・「視力が弱いので、文字の情報をわかりやすくしてもらえたら…」
- ・「聖歌番号やお知らせなど、声でも案内してほしい…」

このような声は、単に情報だけの問題ではなく、信仰共同体に大切な、典礼・祈り・分かち合いへの「参加度」に深く関わる課題だ。

ほかに、「ミサに行きたい」「祈りや分かち合いに参加したい」と望んでも、交通手段や、体力など物理的な障壁のために現地参加できない人々もいる。スマートフォンや PC などを活用して、YouTube 配信を視聴するだけでなく、Zoom など双方向のコミュニケーション環境を作ること、交わりの可能性がより広がる。

もちろん、教会のアクセシビリティの整備は不十分で、「理想」を実現するための人的・財政的資源が限られているかもしれないが、「誰一人取り残さない」教会の本質に関わる営みだとすれば、交わり場の「準備」としてのステップを考えることができる。

1. 声を上げる
2. 耳を傾ける
3. 賛同の意を表し、応援する
4. 対応・改善策を考える
5. 実現に協力する

イエスが「準備」(8月6日教皇一般謁見講話参考)して下さった交わりを深める一歩を大切にしたい。

障がい者委員会

釜ヶ崎で働き、思うこと

玉造教会 ^{たかはし}高橋 ^{いくお}郁夫

最初、福祉には全く縁のなかった人間があるシスターの応援に乞われ、釜ヶ崎の障がい者支援施設に勤めて間もなく20年になろうとしています。

釜ヶ崎での障がい者支援ですから少なくとも二面の支援の要素が含まれています。ひとつは言うまでもなく障がい者支援、そして今ひとつは生活困窮者支援の側面です。今回は釜ヶ崎に暮らす人について書かせていただきたいと思います。

釜ヶ崎で「他の場所では生きていけない。ここだから生きていける。」という表現を耳にすることがあります。言い方を変えれば、生まれ育った環境の中で「生きづらさ」を抱えた人たちが集まるのが、釜ヶ崎だと言えるかも知れません。

そしてその「生きづらさ」は本人の責任によるものばかりではないと思います。現に昨今の医療でいえば、「発達症(障害)」の診断をここに来て初めて受ける人が大勢いらっしゃいます。コミュニケーションが苦手な方も多いと思います。

被虐待と貧困など育った環境が、私たちの想像を絶するものであることを知りました。

釜ヶ崎について色々な声があるでしょう。「釜ヶ崎に住んでいる人は自業自得！努力しないからそんなことになるんや」という声を教会の中で聞いたことがあります。少なくとも私がわかっていただきたいのは、釜ヶ崎に暮らす人たちにやみくもに「自己責任論」を押し付けてほしくない、彼らには彼ら自身のせいではなく、いろいろな背景や理由があるということです。

ある神父は「釜ヶ崎は神の国に近い街」とおっしゃいます。ある知り合いの女性は「カトリックの高校生の時、神父の引率で釜ヶ崎を訪れすっかりその魅力にはまった」と、50歳を過ぎた今もせっせと通っていらっしゃいます。

また、あるシスターは95歳を過ぎても釜ヶ崎に単身で住まわれて釜ヶ崎で死にたいとおっしゃっていましたが、そういうわけにも行かずついに他の修道院に移られました。私にはまだつかみ切れていない魅力がここにはあるのでしょう。声を持たない彼らの存在に気づきその尊厳を認めてほしいと思っています。(ひとりのシスターの新聞記事とある神父のコメントを参考にしました。)

核兵器なき世界に向けて

— 戦後80年被爆地からのメッセージ —

シナピスセンター長 松浦 謙神父

広島と長崎では、1945年8月の原爆投下により、推定で約21万4千人の尊いいのちが奪われたと言われます。原子爆弾は恐ろしい非人道的な兵器です。すさまじい破壊力をもった爆弾が、何の罪もない市民が住んでいる都市にさく裂しました。熱線と爆風によって一瞬にして人間のからだは燃え尽きました。重い火傷を負い、苦しみぬいて息絶えた方たちや、浴びた放射能による後遺症に生涯悩まされ続けた方たちがいました。いのちをとりとめた人々の心と体に 生涯癒えることのない深い傷跡を残しました。



長崎の平和公園の碑文に、被爆したひとりの少女の手記が刻まれています。「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」

戦争に勝者はありません。暴力は暴力しか生み出さず、決して平和をもたらすことはありません。戦後80年にあたる今年6月17日、日本の司教団は、核兵器を地上から無くそうという強い決意を表明しました。しかしながら、和平

への道筋の見えないウクライナやガザを初め、世界情勢は緊迫の度を増しています。イスラエルとイランの紛争を見てもわかるように、戦争はさらに広がる危険をはらんでおり、わたしたちは前例のない世界戦争の脅威の下に生きています。

そのような中で今年も、広島・長崎における集会やミサなど平和旬間行事が行われました。今年注目すべきは、アメリカから4名の司教、韓国から3名の司教が巡礼団と共に被爆地を訪れ、メッセージを発表したことです。

平和集会で、ワシントン DC 大司教区のマッケイ枢機卿は、故教皇フランシスコの「核兵器を使うことも持つことも倫理に反する」と言われたことの今日的意味について語りました。またサンタフェ大司教区のジョン C ウェスター大司教は「非武装は甘い考えだ」という批判に対する反論を展開しました。具体的に、非暴力こそが真の力であるというキング牧師の信念に基づいたアメリカの公民権運動の成功を例に出し、核廃絶への道を勇気をもって踏み出そうと訴えました。

韓国仁川司教区のチョン・シンチョル司教は、「平和は武器によって築かれるものではありません。武器を捨て、対話を行うことによって、相互の信頼関係から芽生えるのです」と呼び掛けました。

わたしたちが平和を実現させるために何をすべきでしょうか？ 故教皇フランシスコは広島を訪れた際、平和を築くために、3つの倫理的義務を挙げています。

第1は「思い出すこと」です。核戦争の恐怖を決して忘れないようにすることです。記憶は痛みを伴うこともありますが、力強いものです。より良い明日を築くためには過去の悲劇を振り返らなければなりません。被爆者の平均年齢が86歳と高齢化する中で、原子爆弾の非人道性を後世に語り伝えていく使命がわたしたちにあるといえます。

第2は「共に歩むこと」です。互いの声に耳を傾け、語り合い、相手を尊重しながら、学んだ大切なことを広く分かち合うことです。そうして和解と平和の道具になることです。真の平和は相互の信頼の上にしか構築できないということを忘れてはなりません。

3つ目は「守ること」です。2024年10月、日本原水爆被害者団体協議会(被団協)がノーベル平和賞を授与されました。「人類は核兵器をなくすことができる」という強い信念をもって声を上げ続けた被爆者の活動が評価されたといえます。日本カトリック司教団は前述の6/17の声明の中で次のように述べています。「わたしたちはキリストの福音に従い、対話を通した平和の実現を目指し、すべての人の生命と尊厳を守るために核兵器を完全に廃絶するよう強く求めます」

「わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」(ヨハネ14:27)という最後の晩餐におけるイエスの約束の言葉を思い起こします。「戦争の惨禍を繰り返すまい」という強い決意と「平和は可能である」という希望をもって歩み続けましょう。

さまざまなメッセージを味わいたい方は、こちらをご覧ください

▶2019年 教皇の日本司牧訪問

教皇のスピーチ「平和のための集い」広島平和記念公園

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19823/>



教皇の日本司牧訪問 教皇のスピーチ 核兵器についてのメッセージ 長崎・爆心地公園

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19818/>



▶日本カトリック司教団核兵器廃絶宣言 2025

<https://www.cbcj.catholic.jp/2025/06/20/32794/>



▶「平和を紡ぐ旅 -希望を携えて-」 戦後80年司教団メッセージ

<https://www.cbcj.catholic.jp/2025/06/20/32786/>



▶広島県知事スピーチ全文

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/wordpress/wp-content/uploads/2025/08/803ebb612dbe42296f1b160224f52371-1.pdf>



「飢餓」に目を背ける世界——第2のナクバの始まり（3）

シナピス運営委員 にしぐち のぶゆき 西口 信幸

神はその力を表し、思い上がる者を打ち砕き、
権力をふるう者をその座から下ろし、見捨てられた人を高められる。

ルカ福音書 1：51-52

聖母マリアが力強く謳われたように、この世に、正義がおこなわれることを、私たちはまだ見ることができないようです。半年も前からWHOも勧告を出していましたが、「飢餓」がガザ絶滅の前兆として現実のものとなってきました。7月中旬から急にSNSの投稿に極度の栄養失調、飢餓で亡くなる子どもの物語が多く出てくるようになりました。また、最後の作戦であるガザの「完全制圧」が決定されて、密かに進みつつあります。先月号でも書いたように、ぎりぎりのいのちの選択を迫られる今、ガザの「魂」が失われようとしています。

完全封鎖とガザ人道財団による飢餓戦略 —— ガザに深く進行する「静かな死」

すでに100人以上の子供が餓死していますが、このまま食料、ミルクが入らなければ、数ヶ月のうちに数万人の子供が餓死することになります。いえ、体力ない人、老人がより多く餓死しています。必要な食料の10%にも満たない空中投下は西洋諸国の免罪符でしかありません。また国連UNRWAによる供給体制を崩壊され、子ども、社会的弱者は取り残されたままです。半年に及ぶ完全封鎖による飢餓をイスラエルはどう思っているのか？230万人のガザ市民はすでに200万人以下に減っているはずですが、完全制圧＝南部への追放、の中での殺害に加えて、餓死者はさらに増加します。このホロコーストを見て放置した私たちは、神さまにほんとうに大きな罪を追うことになります。知らなかったでは済まされません。

飢餓は単なる食料の欠如ではなく、ゆっくりと静かに体に染み込む殺戮の形となっています。かつて走り回り遊んでいた子どもたちは、今や弱々しい姿となり、稀になった食糧支援を待つ子どもの目もうつろで非常に静かです。骨が青白い皮膚の下で突き出し、目は何かを求めるようにくぼんでいます。長引く包囲と栄養不足で、体は自らを消費し始めます：

- ・筋肉が衰える。
- ・重要な臓器が機能しなくなる。
- ・心臓の鼓動が弱まる。
- ・脳は疲労と混乱の霧に沈む。

わずかな病気でさえ命取りになります

— 病院では、医師たちは無力に立ち尽くし、子どもたちが死にゆくのを見守るだけです。

爆弾ではなく、ミルクがなくなり、薬が禁止され、パンが遠い夢となってしまったからです。

これが、封鎖がもたらす死です：騒音もなく、煙もなく、路上に血を流すことなく…体の温もりで生き返るかのように、子どもの体を抱きしめる母親だけを残して、墓地で、静かに…………

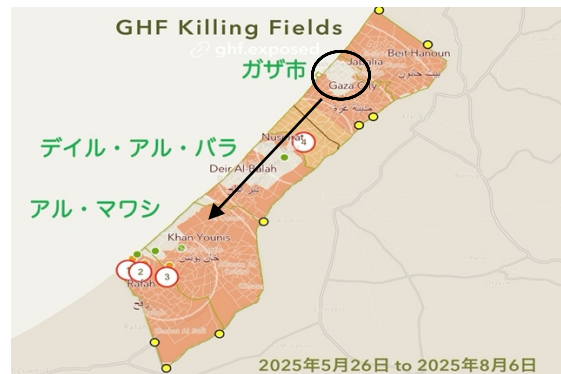


ガザの「完全制圧」と「人道都市」への強制移動——民族浄化に向けて

3月18日から始まったイスラエル軍の侵攻で、ガザ住民は狭い3箇所に閉じ込められています。そして今、ガザの「完全制圧」を目指して、ガザ市に集中攻撃が始まりました。ガザ最終の地ラファに向けて、200万人近い市民の死の行進が、これからまた始まります。

ガザ市の完全制圧（滅亡）

イスラエル政府はガザ市の完全制圧の計画を承認しました。ガザ市の100万人の民間人を10月7日までにアル・マワシに強制移送する計画です。その後、南部に設置する集中キャンプ「人道都市」に、全てのガザ住民を収容する計画です。一度入ったら出ることが許されない「人道都市」は人道法違反の民族浄化です。



ガザ市アル・ザイトゥーンへの侵攻

8月15日、約5万人の住民がいる町への激しい軍事作戦を開始、爆撃は容赦なく続き、1週間で家々は瓦礫に、ブルドーザーによって平らにされました。救護チームも入ることができません。ガザ市の住民には逃げ場も、生きる術もなく、死以外の選択肢が残されていません。かつては繁栄していた地区ガザのアル・ザイトゥーン、静かな廃墟だけが残り、瓦礫の石が語る記憶だけが残ることになります。



光の届かないガザ市 —— アルジャジーラ最後の勇士の死が意味するもの

8月10日、ドローンによって、著名な特派員アナス・アルシャリーフも含めてアルジャジーラ取材班全員が即死しました。アナスは、死の脅威が迫る北部ガザに留まり、民間人犠牲者の惨状や破壊された町を撮影し、イスラエルの戦争犯罪を世界に発信し続けました。「標的リスト」に載せられ、繰り返し脅迫を受けながら、「真実は命よりも重い」と語り、現場を離れませんでした。6月に遺言を残しての死です。アナスたちの死によってガザ市の制圧の様子を映像で伝える人はいなくなりました。



子どもたちの未来を消してはいけません——声を出すことを諦めてはいけません！

「ガザ戦争」は戦争ではありません。世界の目の前で公然と行われているジェノサイドです。当事者であるイスラエル、アメリカだけではなく、世界中の為政者、報道機関、宗教者、そして何より私たち、地球市民の責任であり、神への冒瀆です。絶対に止めなくてはなりません！！2年間、爆撃の恐怖と逃避行、瓦礫の中の耐乏と飢餓のテント生活、束の間の停戦の勝利の歓喜も冷めぬまま、突然の兵糧攻めによる「飢餓」、さらに狭い土地に追いやる「制圧」、待っているのは「強制収容所」暮らし、100万人の幼い子どもたちはついに微笑むことを忘れてしまい、ただ死を待っています。それでも彼らは言います。「私たちを忘れないでください。」



パレスチナ国家承認の嘆願署名

止める手段になるのか？ 今から世界に何ができるのか、遅すぎるかも知れません。しかし、諦めることは許されていません。「何もしない日本」私たちの「無関心」が今、問われています。

ホームから落ちて・・・

マッサージ師 ^{むらき まさやす} 村木 正靖

7月8日(火)の19時20分頃、私は阪急曽根駅のホームから落下しました。

私は全盲で、いつも白杖を使用して歩いています。いつものように、勤めている南森町のマッサージ店からの帰宅途中でした。

電車から降りた時、駅の感じや空気が何か違うなと感じていました。それは一瞬のことで、初めは何が起こったのか分かりませんでした。気が付いたら、右手首に痛みを感じて、転んでいました。

手を伸ばすと敷石に触れたので、これはまずいとすぐに思いました。それから必死でホームによじ登ろうとしましたが、とても手の力だけでは体を持ち上げることは出来ません。

助けを呼びましたが、ホームには年老いたご夫妻と脳梗塞を患っていると後で話しておられた初老の男性の方以外はおられませんでした。

私はホームに頭と肩を擦りつけて、少しずつ体重を上半身の方に移動させ、足をホームの端にかけて、どうにか自力で這い上がることができました。

手首の骨に僅かなひびが入っていたようですが、幸い他に異常はありませんでした。おそらくリュックがクッションとなって頭などを打たなかったのでしょう。

ホームに上がって初めて、いつもの駅ではないことに気がつきました。私はいつも豊中駅で降りているのです。

阪急宝塚線は、2025年2月22日よりダイヤ改正が行われました。それまで、急行に乗ればいずれも十三^{じゅうそう}の次の停車駅は豊中でした。ところが、平日夕刻のラッシュ時間帯に、急行の停車駅に曽根と岡町を追加した通勤急行が新設されました。

私はもちろんこの事を知っていましたが、人の感覚と習慣は不思議なものです。長年、十三の次の駅で降りるということを体が勝手に憶えていて、何も考えることなく、何の疑いもなく電車を降りてしまいました。

曽根駅のホームは豊中駅と違い、ホームの幅が狭いです。その上、大阪行きと宝塚行きとはホームが異なっていて、それぞれに電車が停車する路線と通過する路線があります。

私は、この特急が通過する線路へ落下したのです。思い出すと、今でも背筋が寒くなります。

昔は視覚障がい者の間のブラックジョークで、「ホームに落ちて、視覚障がい者一人前」と言われていました。その話を聞いた時には、まさか自分がホームから落ちるなんて、想像もしていませんでした。

でも、せっかくホームから落下したのだから、視覚障がい者の落下事故の現状と国や鉄道会社の取り組みについて、ちょっと調べてみようと思いました。

過去の事故を新聞記事で探していると、私と似たような事故を見つけました。

東京都杉並区のJR阿佐ヶ谷駅で、2020年7月、視覚障がい者の男性がホームから転落し、死亡した。男性は、自力でホームに這い上がろうとした。近くの人が助けようと駆けつけたが、間に合わなかった。(読売新聞オンライン、2020/08/08)

駅ホームは視覚障がい者にとって、「欄干のない橋」と言われています。

少し古いデータになりますが、2019年度の駅ホームからの転落事故は2888件で、このうち視覚障がい者の事故は61件です。また、身体障がい者が関わる転落死亡事故は5件で、そのすべてが視覚障がい者だったということです。

視覚障がい者のホームでの転落件数が全体の転落件数に占める割合は、近年は2～3%の間で推移していると言われています。日本の全人口に占める視覚障がい者の割合が0.25%程度であることをふまえると、ホームから転落する視覚障がい者の割合がいかに高いかが読み取れます。国や鉄道会社もこの事態を重く見て、この20年間で視覚障がい者を取り巻く移動環境は激変しました。設備面では、駅ホームの内側を示す内方線付き点字ブロックの敷設が進み、ホームドアの設置が増えています。

鉄道利用者のホームからの落下事故を防ぐための最も有効とされている対策は、ホームドアの設置であると言われています。

しかし、ホームドアが設置された駅は、全体のまだ1割程度にしか過ぎないのです。また、1日あたりの平均利用者が10万人以上という大規模な駅の中でも、ホームドアが設置された駅は約3分の2であり、鉄道会社によってばらつきがあります。

ちなみに、大阪メトロは2025年度末までに全駅ホームドア設置予定とのことです。また、駅員、駅掛かりつけヘルパーによる誘導案内を実施しています。東京メトロは、一部の路線と駅を除いて設置が完了し、未設置駅名を公表しています。私が落下した阪急電鉄では、ホームドア設置率はまだ9%。2040年度末を目途に、設置していくとのことです。

ホームドア設置には多額の費用がかかる上、ホームの強度が足りない、車両によって扉の位置がずれるといった課題もあるため、思うように進んでいないのが現状です。

国は21年、駅のバリアフリー化のための費用を運賃に上乗せできる仕組みを導入し、設置を促しています。

人的には、駅員による声掛けや見守りの徹底が広がっています。更に、制度面では、同行援護事業がスタートし、ガイドヘルパーを利用する視覚障がい者が多くなりました。

今回の事故で、視覚障がい者の一人歩きは常に危険と隣り合わせだと思い知らされました。視覚障がい者が安心して利用できる駅は、お年寄りや子ども、妊娠されている女性の方にも利用しやすいはずです。できるだけ早い駅のバリアフリー化が待たれるところです。

最後に、周囲の鉄道利用者の行動と意識についても述べておきましょう。私が白杖を使って歩いていて怖いと思うことは、「ながらスマホ」歩き、ホームを走る行為、また点字ブロックの上に荷物が置いてあることなどです。

ぶつかったり、荷物にけづいたり、また、それらを避けて歩いているうちに、自分の位置と方向を見失ってしまう恐れがあるからです。

いずれも悪気のない行為なのでしょうが、視覚障がい者に対してだけでなく、周囲の人へのちょっとした心遣いと想像力をもっていただければと思います。

〔参考〕

第一生命経済研究所、水野 映子 2022/09/02

毎日新聞 2023/02/06 東京朝刊

毎日新聞 2020/12/06 東京朝刊

視覚障害者の歩行の自由と安全を考えるブルックの会 2019/08/26



奇跡の手紙

社会福祉法人「ミッションからしだね」

さかおか めぐみ
坂岡 恵

「ミッションからしだね」の職員だった武山世里子^{たけやまよりこ}さんは、今年8月5日、5か月足らずの癌の闘病生活を終え、皆に惜しまれながら天に帰って行きました。53才の誕生日を迎えたばかりでした。

「なんとなくご飯がおいしくない」と言い始めた3月半ば、世里子さんはいきなりステージ4の癌の診断を受けました。彼女は仕事で関わる人達に自分の病状をオープンにして協力を仰ぎ、きつい抗がん剤治療にチャレンジしながら、仕事を続けていました。

世里子さんの癌を知った人達は皆、驚き、とまどい、その状況を受け入れることができませんでした。そして、それぞれがせいっぱいの言葉や行為で、世里子さんの回復を願う気持ちを伝えました。もしかすると、彼女の気持ちに沿わない不器用な言葉や行為もあったかもしれませんが、世里子さんはその奥にある優しい気持ちをくみ取って、決して傷ついたり不快になったりせず、心から感謝して受け止めてくれました。

彼女の天然の笑顔とたたずまいは、彼女を失いたくない人達の中にある「愛」を倍にして引き出し、悲しみとうめきの場を、お互いを思いやり、お互いを気遣い合いながら、喪失の痛みに耐える場にしてくれました。

世里子さんは、マラソンにも挑戦していました。嵐山に続くきれいな桂川沿いにマンションを借りて、早朝ランニングを楽しんでいたそうです。一人暮らしの部屋には、世里子さんお気に入りの物を厳選して置いていたとのこと。

けれども、療養のためにご両親の住む実家に戻るようになった時、「部屋にある大好きだった物たちを、平気でどんどん片づけている自分に驚きました。なんの執着もないんです」と彼女は、大発見をしたかのように話してくれました。

それから「ベッドから起き上がってトイレに行く時、『どうかお願い、私をトイレに運んでください』と、ていねいに足にお願いしないといけなくなりました」と言いました。

「結局、私に残る物って何もないんですね。だからもし快復したら、自分の物を集めることより、私の周りにいる優しい人達に、その人達が私にしてくれた同じことを、お返ししに行きたい。それが今の私の唯一の希望です。そのために私は、がんばって生きます」

私はフランシスコ教皇の最後の手紙（「この世に私のものは一つもない」）を、LINEで世里子さんに送りました。すると、彼女はすぐに返信をくれました。「この手紙、沁みます。私と教皇さんが重なると言ったら怒られそうですが、でも、ほんまに、言うてはることが、自分の言いたいことのように思えて・・・」と。

最近になって私は、その手紙が本当にフランシスコ教皇が書いたものかどうかはわからないと、教えていただきました。その時はちょっとがっかりしました。けれども、少なくとも世里子さんは、厳しくつらい抗がん剤治療の最中にあの手紙を読み、深く共感し、心のなかで反芻していたことと思います。誰が書いたのかはわからないけれど、フランシスコ教皇の名前を借りた、あの奇跡のような手紙は、たしかに世里子さんに届けられました。

神様が、特別な「誰か」に書かせてくださったのだと私は信じています。世界でたった一人の、大切な世里子さんに宛てて。

シナピスのみなさま、世里子さんの人生に触れてくださって、ありがとうございました。縁を結び、言葉を交わし、助けてくださって、本当にありがとうございました。

「ミッションからしだね」と武山世里子さんがいただいたシナピスとのご縁

- ◆社会福祉法人「ミッションからしだね」は、京都市山科区で、障がいのある方々の地域生活を支える福祉事業を行っています。
- ◆また、その時々での社会の必要に応じて、小さな支援活動も行っています。2020年のコロナ禍では、地域の方々から寄付金が集まったので、当時、品薄だった医療用ガウンを手作りして届けようという「ガウンプロジェクト」を始めました。寄付金はガウンの材料費と作り手の手間賃にあてることにしたのですが、作り手として手を挙げてくださったのが、シナピスでした。
- ◆武山世里子さんは、ガウンプロジェクトのリーダー的存在で、シナピスのガウン製作現場にも足を運び、ピカピカに清掃された広い部屋で、徹底的に衛生管理をしながら、ていねいに作業を進めている外国ルーツの方々の方々の姿を目の当たりにしました。
そして、「『このガウンが医療従事者を守り、患者さんたちを守るんだ』という自信と意気込みと誇りを感じました」と言っていました。以来、入管法改悪デモに参加するなど、世里子さんなりの小さな行動を起こしていました。
- ◆「日本人ファースト」が大きく取り上げられた参議院選挙の結果を受けて、がっかりした世里子さん。緩和ケア病棟から、こんなラインを送ってくれました。
「でも、私達のできることは、小さくても、さわやかで、裏表のない、安心できる時間や場所を提供し続けることかもしれませんね」

事務局よりお詫び

シナピスニュース6月号に掲載しました「故フランシスコ教皇が遺した手紙」ですが、ご自身が書かれたものではない、とカトリック教会は公式に判断しているものでした。事実確認を怠り、みなさまにお届けしましたこととお詫びいたします。また、シナピスニュースからこの手紙を広められた方もあり、大変ご迷惑をおかけいたしました。重ねてお詫びいたします。

「不法滞在者ゼロプラン」に隠された偽情報

おおもと あさみ
大元 麻美(フリーライター)

今年5月に、法務省・出入国在留管理庁(以下・入管)が公表した「国民の安全・安心のための不法滞在者ゼロプラン」。目的は「ルールを守らない外国人により国民の安全・安心が脅かされている社会情勢に鑑み、不法滞在者ゼロを目指し、外国人と安心して暮らせる共生社会を実現する」ことだという。

しかし、内容には矛盾点がある。看過できない2点を指摘したい。

第1の問題点は「不法滞在者」という表現だ。

「不法滞在者」には「法を犯して滞在している人」という悪いイメージがあるが、実際は「在留資格がない人」のことに過ぎない。

母国で迫害に遭い、命を守るため早急に国外に脱出をしなければならない外国人は、観光ビザが取りやすい日本に逃げてくることがある。日本の空港に到着すると、彼らは入国審査の時に、難民として保護を求める。日本は難民条約に加入しているので、難民たちは「やっと命の危険がなくなった」と安堵する。

しかし、入国審査をする職員は「目的は難民として保護されることであって、観光ではないのですね」と言っ
て、難民たちの「観光ビザ」を無効にしてしまう。つまり、難民たちの在留資格を奪い、難民たちをわざわざ「在留資格のない状態」にしてしまうのだ。そして彼らを「不法滞在者」として入管の施設に送り、無期限で収容する。

また在留資格のある外国人が、入国後に難民認定申請をした場合でも、1回目の申請で不認定になった瞬間、これまで持っていた在留資格が無効にされてしまうのだ。

その結果として、難民認定申請を2回以上している外国人は全員、在留資格を失っているのだが、これはみんな入管の成せるわざ。入管が在留資格を奪っておきながら、彼らを「不法滞在者」と呼ぶのは、明らかに事実
に反する。「不法」という言葉の持つイメージ戦略にだまされてはいけない。

第2に問題にしたいのは、「ゼロプラン」の対象者について「誤用・濫用的な難民認定申請を繰り返している者を含め、ルールを守らない外国人」と書かれていることだ。

日本は先進諸国の中でも難民認定率が極端に低い。その最大の理由は、難民認定を専門にできる第三者機関が存在しないからだ。そのため、外国人が母国での迫害の証拠をいくら提出しても、入管は難民認定をしない。結局、母国に帰れない難民たちは、何度も申請を繰り返すことになる。

正真正銘の難民に在留資格を与えない入管が、入管行政の犠牲になっている彼らを「誤用・濫用的な難民認定申請を繰り返している者」と呼ぶのは不当で誤ったものだ。

昨年6月10日に施行された「改定入管法」によって、施行日以降に3回以上難民認定申請をした者を強制送還できるようになった。この「改定入管法」と今回の「ゼロプラン」が合わさって、難民認定をされることなく強制送還されるケースが加速している。その中には日本生まれ日本育ちの子どもも含まれていることを見
ごしてはならない(署名活動 <https://x.gd/f1VXd>)。



シナピスホーム便り(番外編)



「当たい前の毎日なんか一日もない！」

事務局 やまだ な お こ
 山田 直保子



毎日暑いですね～というのが挨拶の今日この頃、私たちは元気にカフェをオープンしています。
毎週土曜日のお昼からはぜひシナピスカフェへお越しくださいね。

今回はシナピス活動センターや、シナピスホームに遊びに来たりボランティアをしてくれたりしている
ナイジェリア国籍の O さんのお話をしたいと思います。

先日、O さんから連絡があり、入管へ嘆願書を書いてほしいとお願いがありました。
友人の同国人が 2 週間前に強制送還され、自分もそうなるのではないかと非常に恐れていました。
彼は、結婚して子どももいますが、仮放免のままで、今回入管が打ち出した「ゼロプラン」で、周りが強
制送還されていることを知り、毎日生きた心地がしないのです。

シナピスホームに来てもらって話を聞くと、いつも明るい O さんはとても暗く、声も小さく、 まった
く覇気がないように感じました。待ち合わせに一時間以上遅れるルーズさは変わらないけれども、
落ち込みは相当でした。

物価高で、家庭を持つ人は日本人でも大変な状況ですが、いつまでも仮放免で就業は禁止されてい
る O さんの家族は、疲弊し、いつまで続くかわからないこの状況と、同じように仮放免で同国人が
強制送還された事実、まともな精神状態ではいられない恐怖が彼を襲っていました。

入管に収容されているときから面会に行っていた私は、仮放免で出てきた後から、自主的に教会
のお掃除をしたり、高齢の信徒の皆さんに英会話を教えてくれたり、シナピスの能登への被災者支
援に参加したり、たくさん社会貢献している O さんを見てきたので、少しでも彼の力になるならと、
頑張って嘆願書を作成し、彼に渡しました。

聞き取りをしたあとも、私には他の業務もあり、なかなか作成することが出来なかったのですが、
O さんからはまだかまだかと毎日のように連絡があり、一日遅れるたびに、絶叫の声を上げるので
す。謝りながらも、他の仕事もあるからと言いつつ、彼の焦りに、今日このあと入管に捕まるかも
しれない、明日捕まって、強制送還されるかもしれないという恐怖が私にも襲ってきます。

嘆願書一枚でどうにかなるものではないのですが、彼の気持ちとともにキーボードを打つ手が震え
てきました。やっと書き上げ、内容を理解した後に O さんは入管に提出しました。

仮放免の人をたくさん抱えているシナピスは、この「ゼロプラン」が、私たちの友をいつ強制送還さ
れるかわからない恐怖にたちまち追いやられています。当たり前の毎日なんか一日もない。明日、
誰かがいなくなるかもしれない。伝えることは後日ではなく、今伝える。心が落ち着かない毎日で
すが、毎日やるべきことをやっていくしかないのです。情報に惑わされず、しっかりと向き合ってい
こうと決意している今日この頃です。

事務局こぼれ話 その1



事務局 おかだ まさよ 岡田 雅代

海外の体験で思ったこと

皆さま、以前にもご紹介したアフガニスタン人の A さんのことを覚えておられますか。

彼女は、ニコニコあっけらかんと明るい人(シナピスニュース4月号「シナピスホーム便り」)であり、また一生懸命話す人でもあります。

「これどうなってますか」「どうぞ食べてください」「それはわかりません」…片言の日本語をどんどん繰り出して、私たちに話しかけてくれるのです。それも飛び切りの笑顔で。

そうすると私たちも、「どういうこと?」「なにがあったの?」と、思わず話に釣り込まれてしまい、知らず知らずのうちに、なんとか会話を交わそうと努力しているのです。

それがどれほどすごいかというと、アフガニスタン料理を作るための食材を買うためにたった一人で出かけていき、片言の日本語で道行く人に尋ねながら、ついには売っている店を探し当て、お目当ての食材を買うことができた、というエピソードがあるほどです。

「たとえ片言でも、自分が知っている限りの言葉を繰り出してわかってもらうまであきらめず、相手に理解してもらう努力をする」。私は、そんな A さんの様子にすっかり触発されて、「A さんのようにあきらめずに一生懸命話がしたい」とひそかに思っていました。そうしたらなんと、ドイツで1週間ホームステイするという機会が私に訪れたのです。

私は、ドイツ語はまったく分からず中学生レベルの英語だけ話せるという状態です。幸いなことにどこでも英語が通じましたから、とにかく一生懸命話しました。

相手が何を言っているのか分からなければ「もう一度話してほしい」と頼み、それに答えるために文法はさておき、知っている限りの単語を繰り出し、どうやら通じていないとわかると、もう一度言い直して、と懸命に話してきました。

そうしながらいつも思い出していたのは、A さんが笑顔で話す様子です。「A さんのように話そう。笑顔で話そう」を続けて、「語学力はないけれど、コミュニケーションはできる」と認めてもらうことができました。よかった。

「A さんありがとう!」A さんに感謝すると同時に、「私は母国語の世界に戻るけれど、A さんは思うように言葉が通じない世界にずっと暮らしている」と、そのことを思わずにはいられませんでした。

事務局こぼれ話 その2

事務局 ビスカルド篤子^{あつこ}

必要なのはズバリ、現ナマ！！

北アフリカ出身の難民申請者の家族にかかわっています。

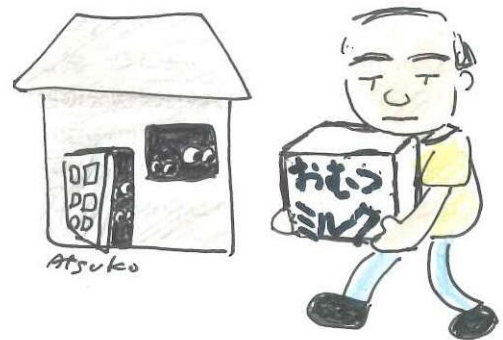
7 月のある夜、そのお母さんから「歯が痛くて死にそうです」とメッセージが入りました。乳飲み子 2 人を抱えるお母さんは、自分のことはずっと後回しにしてきたのでしょうか。きっと本国を逃れ日本にたどり着くまで子どもたちの命を守るのに必死だったのだと思います。

歯痛とあれば歯科にかからないとどうしようもありません。真夜中でしたが私は病院を探しました。運よく歯科が見つかり、救急車も手配できました。ただし病院も救急隊も「支援者がつく」のを条件としての承諾です。私は病院へ向かいました。歯痛は“親知らず”が膿んで神経を蝕んでいたのが原因でした。私は手持ちの現金で医療費を支払い、彼女をアパートまで送迎しました。1歳と0歳の赤ちゃんはお父さんが見ていました。

また 7 月下旬には、赤ちゃんが高熱を出して、救急搬送される事態が起きました。私は遠方にいたので、搬送先の病院と電話で話し合いました。「市民レベルでカンパを呼びかけてみるが、額は知れている」と訴え、必要最低限の処置に抑えてもらって医療費を支払いました。

社会の谷間であえぐ難民たちは後を絶ちません。中でも乳幼児のいる家族は、複数の手がないとすぐさま生命が脅かされる危機に陥ります。

いま大阪では、こうした難民の幼子たちの存在を知った人がつながって命を守ろうとする動きが広がりつつあります。住まいを探してくれた人、ミルクやおむつを届ける人、安否確認に家庭訪問を続ける人。世の中にはこんなにフットワークの軽い人たちがいるのかと感動させられます。ただ、必要なのは、ズバリ現ナマです。ミルクやおむつの費用、支える人の交通費、お金がなければ何も動けません。



そこで「シナピスこども基金」では、3ヶ月限定で「難民の乳幼児を救うキャンペーン」を実施することになりました。詳しくは裏表紙をご覧ください。

その上で大切なのは、公助への働きかけです。私たちは、政府にも入国間もない難民申請者への「取り急ぎの支援金支給」を制度化してほしいと考えます。

無理な話ではありません。日本政府には、2023 年に千人単位で日本に入国したウクライナからの避難民には1人につき 16 万円を支給した実績があります。国籍で線引きせず、そして支給するかどうかの調査に時間をかけずに、まずは生命維持に動いてほしいと切に願います。

緊急！！

乳幼児の難民を助けよう キャンペーン

期間限定 10 月末まで！

*振込は、このページの右下から

わたしたちにもできることがある！

排外主義反対

▶参議院選挙にあたり排外主義の扇動に反対する NGO 緊急共同声明

<https://migrants.jp/news/voice/20250708.html>



▶子どもの強制送還をやめて オンライン署名
https://www.change.org/nannmin_children



▶難民・移民と“ともに生きる”を考える
オンライン集会

<https://x.gd/Xz1RC>



ジェノサイドに抗議

▶オンラインセミナー
「ガザ人道危機のいま」9月25日（木）

<https://ccp-ngo.jp/news/>



▶パレスチナ国家承認の嘆願書名

https://www.change.org/Palestine_State_Recognition



▶スタンディング@神戸

<https://x.gd/kWuhm>



「ニュースレター配布停止」、「点訳版の郵送」を
ご希望の方はシナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784



シナピスホーム（カフェ）

9月の予定

カフェ：6日、13日、20日

★土曜日の13時頃～16時頃

ランチ：27日

★土曜日の11時頃～16時頃

★ランチは要予約

☎ 080-8940-8847

あとがき

太陽がじりじりと照り付けて異常なくらい暑い今年の夏。暑いだけではない、肌が焼けるような痛みを感じたときに原爆が落とされたときのことを想像しました。こんな痛みよりも想像できない痛みが人々を襲い、川に飛び込んだまま亡くなり川は遺体であふれたといひます。天気予報で観測史上初という言葉は毎年のように聞かれ更新している気がしますが、この焼けるような痛みは神様が戦争はあかん！と声をあげることを忘れないようにねと言っているような気がしました。原爆を落とされた日本。その前に日本がしてきた様々なこと。少しでも勉強し、戦争を経験したことのない私でもできることは、戦争はしないでと声をあげることです。（なおこ）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達

・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 1 3 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区シナピス

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

